食品産業と農業との連携を目指して　第1回

『農業経営者』と巡り会ったころ、そして今

農業経済学者として本誌にもたびたび登場してきた大泉一貫氏（宮城大学名誉教授）。農業の産業化を提唱し、成長志向型農業の理論的基盤を作ってきた。農政論としても、保護農政から成長産業化への転換にかかわる理論的貢献を果たしてきた。そんな氏が、食品産業に従事する商工業者や流通業者が農業者と連携する「フードチェーン農業」を中心に不定期で語る。

profile

宮城大学名誉教授

大泉 一貫

おおいずみ・かずぬき

1949年、宮城県生まれ。東京大学大学院修了。農学博士。一次産業の成長化を主張、地域経済の活性化の研究に従事。著書に『日本の農業は成長産業に変えられる』（洋泉社）、『希望の日本農業論』（NHK出版）等。日本地域政策学会名誉会長。「世界の英知を復興へプロジェクト」代表。内閣官房「食と農林漁業の再生実現会議」、「産業競争力会議農業分科会」委員・有識者等歴任。

1 『農業経営者』に出会ったころ

昨年、『農業経営者』11月号に久しぶりに原稿を書かせてもらった。堂島市場の本上場不認可についてである。その縁で、これから機会を見つけては時折、寄稿させていただくことにした。最近、いろいろなところでお話をさせてもらっている「フードチェーン農業」に関して折に触れ書かせてもらおうと思っている。

その前に、今年の2月号に昆編集長が「本誌のバックナンバーをご覧ください」と書いていた。それに触発され、創刊のころを思い出した。

『農業経営者』は創刊以来、農家が如何に「自尊心」を持ち続けるかをメインテーマにしていたように思う。経営者になるのはその手段だったろう。この本をはじめて知ったとき、雑誌タイトルにいたく感動した記憶がある。

80年代後半、私も同様の考えをもって孤軍奮闘していた。まさに「孤軍」でしかなかった。仲間ができたようなうれしさがあった。なにより、農業でも普通に経営を考えた方が良いという自信を得たようにも思った。全国の農業経営者のデータベースとして使えるといった研究者にとってのありがたさもあった。

そもそも当時の農業界に「経営者」という概念はなかった。そこに堂々と『農業経営者』と銘打った雑誌が出てきたのである。「経営という概念がない」というと、今の人には信じられないかもしれない。信じなくてもいいが、雑誌『農業経営者』はそうした経営のない農業界の状況とまともに戦っていたのである。

2 農家の自尊心の問題と農業経営者

『農業経営者』の創刊当時、私が気になっていたのは、私と同じ世代の農家の長男の就職問題だった。そのころ、大学の農学部出身者でも農業を営む者は皆無だった。高卒でも、農家の子弟で少し機転が利く者は役場や企業などに勤めはじめていた。そうした中で、長男であるが故に農業を継がざるを得ない者には、ある種、時代に取り残されてしまったといった感覚が残っていたように思う。村に残って農業に従事する、そのこと自体が彼らの「自尊心」を毀損しはじ

めていた。

私は、いっぱしの経営者として成功することが「自尊心」の取り戻しになると考え、「村に農業経営者を」と主張し、様々な活動をしていた。

彼らと何度も話を繰り返してきたが、彼らも彼らなりの自尊心のよりどころを様々に模索していた。その一つに政治家がある。政治家というより、選挙で選ばれる職業といえばよいのかもしれない。例えば、町議や市議、さらには農協の理事、はたまた農業委員会の委員といったものである。これらはいずれも投票行動を伴うが、他者から認めてもらうには投票というお祭りを通過儀礼とし、それによって村の有力者への道が開けたのである。

彼らのこの精神は、いまでも例えば消防団など地域の役職を担い、村の維持に大いに役立っているのだが、それでも彼らの経済的基盤を作るには農業経営者になることが大切と私は思っていた。「町のリーダーがみすぼらしい農業をしていたら誰も信用しないのではないか」等々と言いつつ、「経営」を説いていった。農業経営者という言葉が一般的でなかった当時、彼らを「機関車農家」と呼び、経営の方法を模索して激励していた。

80年代後半の活動だったが、こうした時期に出会ったのが、『農業経営者』であり昆編集長だった。当時の『農業経営者』（今でもそうかもしれないが）は若干、技術偏重的なニュアンスもあり、どこまで経営というコンセプトを打ち出せるか気にはなっていた。その辺のいきさつは、編集長自らが書いた2月号の「江刺の稲」に詳しい。

3 社会に必要とされる農家

そんなある日、仙台にある「白松が最中」の白松一郎社長を通じて昆氏から電話がかかってきた。「白松がモナカ本舗」は、宮城県色麻町に栗園を持ち、国産小豆にこだわった商品作りをしていた。その取材に来ているという。

白松社長を通じて連絡が来たのは当時、私が主宰する「瓜の会」を手伝ってもらっていたからである。「瓜の会」は、88年から10年間、仙台ホテルで毎年開いていた会である。瓜は、すでにプリンスメロン等々に押されて価値がなくなってしまったマクワウリのこと。市場には出なくなっていたので、農家の人々に作ってもらい、仙台ホテルで食べるという会だった。

これがところがどっこい、人々に多くの人気を博した。仙台七夕のころ、毎年100人を超える参加者があり、瓜を食べるパーティを開いた。もちろん出すのは瓜だけではない。仙台ホテルの原田総料理長と一緒に農村の食材を開発し、ホテルで調理して提供した。「米山町の○○さんの野菜で作った○○」といった具合である。当時このパターンはまだどこにもなかった。

これに驚いたのが、農産物を作った農家の人たちだった。自分たちの農産物をこれだけの人が喜んでくれている。私たちは人の役に立っている。はじめて自分たちの客を知ったのである。

経営学でいえば、顧客の発見と新商品開発ということになろうか。「人々に必要とされている」という実感を得られたこの会が彼らの自尊心の回復に役立っていたことは間違いない。

話としては、今や当たり前の話でしかない。

こうした活動をしているころに、昆編集長とはじめてお会いしたのである。

あれから30年、農業経営者と呼ばれる人々は、私の感覚ではもう既に第4世代に入っているといった感じがある。農業経営者とは言わないまでも、農政を語らないとはじまらなかった農業の世界が今は全くそんなことはなくなった。考え方もアップロードしている。

4 保護農政のアンチテーゼとしての『農業経営者』

『農業経営者』創刊当時、農業・農村の課題は、農家の経済的自立にシフトしていた。それはある意味、市場や経営への関心と表裏一体のものだった。だが、戦後の農政改革が目指したのは、農民の貧困からの開放であり、農民の自作地への解放であった。それを保護農政という。90年代に至っても、その思想は農業界や農政の底流から抜けることがなかった。生産性や付加価値の向上を語っても一蹴されてしまうのが保護農政だった。

ただ、当時の農水省も、のちに農林水産事務次官となる高木勇樹氏（当時企画室長）らが主導し、「新しい食料・農業・農村政策の方向（通称新政策の方向）1992年」と銘打ち、農業経営を視野に入れた農政に舵を切ろうとはしていた。

経営というコンセプトがない農業界に、経営を浸透させるため、認定農業者制度や法人化を推進しようとした。

それでも保護農政の思想は根強く、農業法人協会を作るまでには多くの紆余曲折があった。保護農政の本格的な転換には、２０１３年に経営主導農政が起動する「攻めの農林水産業」まで20年も要している。

その間、『農業経営者』が、経営の視点から農政を論じ、社会を評論した意義は非常に大きいものがあった。

農業技術通信社の一つのエポックメイキングに、農業のビジネスプランコンテストである「Ａ－１グランプリ」がある。２０１０年前後でなかったろうか。私はこの会で、鹿児島の坂上隆氏や農業総合研究所の及川智正氏らに初めて会った。それまでばらばらだった農業経営者が、層をなして表舞台に出てきた時期ではなかったか？

このグランプリに出た農業経営者がおそらく第3世代の経営者あたりに位置付く。

第1世代は、農業法人協会の立ち上げに尽力した坂本多旦さんや秋田は大潟村の経営者たちあたりとすれば、第2世代は、千葉の和郷園や群馬の野菜くらぶといった１９６０年代半ば生まれの人たちだろうか。そして、第3世代の後に今や第4世代だ。

それにしても、経営というコンセプトがない時代に、『農業経営者』という表題をつけてよくここまでやってきたものと感心する。

考えて見れば『農業経営者』の存在意義が際立っていたのは保護農政があったからではなかったか？　保護農政のアンチテーゼとして『農業経営者』があったのではなかったろうか？　とすれば保護農政が終わりかけているこの10年、『農業経営者』には新たな方向が求められなければならないのだろう。

5 スマート・テロワールとフードチェーン農業

農業技術通信社は今、「農村経営研究会」という活動もしている。見ているのは、「農村にこそ日本最後の成長余力がある」としたカルビー元社長の故松尾雅彦氏の世界であろう。

松尾氏の「スマート・テロワール」にはいくつかの特徴がある。一つは、ヨーロッパ発の美しい村づくりがベースということ。もう一つは食品加工業と農業の結びつきを考えていること。さらに、三つ目に自給圏といった発想である。

実はアンチグローバリズムなど他にもいろいろと特徴があるが、リアリストとしての松尾ロジックにしぼって考えてみれば三つになるということである。それでも自給圏はなかなかリアライズするのは難しいと私は考えている。それがなぜリアリスト松尾の一面かといえば、農家の市場選択の問題と解釈しているからで、そう考えればこれもありと考えたのである。

そんな松尾氏が、私の講演を聴きに来てくれたことが三回ある。一度は経団連での講演。二回目は、私が委員長をしていた、山形置賜郡飯豊町が主催する自給圏運動の論文表彰式に第一席となり、出席していただいたとき。さらに三回目が、２０１９年1月に行なわれた農業技術通信社主催のセミナーである。

その三回目のときに、「君のフードチェーン農業は、私のスマート・テロワールと同じだ」とのコメントをいただいたのには驚いた。確かに発想の起源にヨーロッパがあり、食品加工業との連携など、共通項があった。

私が考えていたものには、輸出などグローバル展開する農業も視野に入っていただけに、フードチェーン農業をスマート・テロワールと結びつけて考えることはあまりなかった。農業という産業の経営への純化を模索していた私からすれば、意識的に視野から消していたのかもしれない。

しかし、考えてみれば、フードチェーン農業には、Globalもあれば、スモール、あるいはLocalもあると考える方が素直なことは確かだった。

私の見たい農業・農村は、個々人が社会的にも個人的にもある種の充足感をもって仕事をし、生活する日常を作っていく、というものである。それには何らかの形で価値創造をする継続的な行動が必要になると私は勝手に思っている。価値創造を何に求めるかもあるが、やはり働く機会、場所が必要だろう。農村で働く場所といえば大半が小規模な経営である。自身で起業してもいいし、雇用という形でもいい。村づくりがビジネスになるならそれもいいだろう。その際には、社会や他者との関係をどの様に切り結ぶかが見えてなけ

ればならない。そう考えると、他者とアライアンスを組みながら行なうフードチェーン農業はそうした中の一つとなる。

6 田舎の価値創造にターゲッティングできるか

そこで、松尾氏のスマート・テロワールだ。氏の自給圏でも雇用の場や価値創造の場を模索している。農村や漁村という言い方もあるが、都市と対比し田舎と言った方がよいのかもしれない。田舎の資源を使いながら、社会に通用する価値を創造し続けること、これがこれからの期待されることかもしれない。

田舎はマイナーな存在である。農業ジャーナリストの浅川芳裕氏の言葉を借りれば、「少数者として存在する者はそのこと自体エリートである」という。エリートであるからには何らかの社会的選抜がいる。それが価値の創作活動なのではないか。8割はおそらく現状のままだろうが、2割に火がつけば田舎の価値創造は活発になる。

時代は、農業経営者も含めて、田舎から如何に価値発信をするか、に変わってきている様な気がする。経営者から見れば、村のため、地域貢献を視野に入れるということになる。

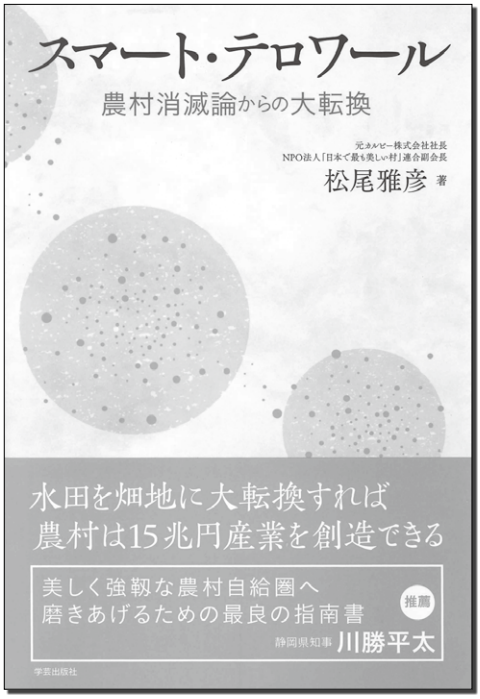
そう考えてみれば、農業技術通信社の役割は、農家の自尊心を維持するといったことから、農村以外の住民と意義のある関係を結びつつ、田舎の価値創造企業を如何に作りあげるかといったことにシフトしていくのではないだろうか。自分のことを考えていた農業経営者から、他者を意識し、地域に貢献しようと考える経営者へのビジネス領域の拡大でもある。

ここにはまた新しい経営ノウハウが必要となる。田舎の価値創造の経営学とでもいったところである。

目的のためには活字の雑誌がいいのか、デジタルデータで隠すことなく情報を発信し続けるのがいいのか、これも考えどきの様にも思う。

事は、民から、しかも少数者からはじまることが多い。その少数者と一緒になりながら、価値を創造し続けていってほしい。対象が少数者だからといって、集まる人々が少数とは限らない。これまで創造に関心を示さなかった人々も含め、やはり「良いものは良い」と感じる力はある。「対立から包摂へ」とシフトするときは今と思う。

スマート・テロワール　農村消滅論からの大転換



曖昧な活用の100万haの水田を畑地に大転換すれば農村は15兆円産業を創造できる

限界集落、市町村消滅!?本当だろうか。消滅どころか、農業・農村にこそ成長余地がある。その実現を阻んでいるのは、水田を偏重する「瑞穂の国」幻想だ。余っている水田や休耕田を畑や放牧地に転換し、その生産物を域内の工場で加工すれば、味はもちろん、価格も、輸入原料によるナショナルブランド商品に負けないものがつくれる。その商品を域内の消費者に新鮮なうちに届け、最高の状態で提供するとともに流通コストを抑える。ここで大切なことは高級品ではなく、日常食品でシェアを確保してこそ量のメリットも得られることだ。そうしてこそ、一部ではなく全体の復活につながる。曖昧な活用の水田100万haがよみがえれば、15兆円の新しい産業創造につながる(ジャガイモの生産と加工によるカルビーの工場出荷額から試算)。契約栽培で市場価格の30%オフを実現したカルビー元社長の「辺境からの変革」の提案。

松尾雅彦 著　　書籍 四六判・256頁　学芸出版社 刊

■ 1,944円（税込）＋郵送料360円